

3人会話における母語話者により始められた他者開始修復
—母語話者が非母語話者に配慮を示すやり取りの再考—

OTHER-INITIATED REPAIR ON TALK BY NON-NATIVE SPEAKERS
IN 3 PARTY CONVERSATION:
CONSIDERATION OF NATIVE-SPEAKER-INITIATED REPAIR

初鹿野阿れ, 名古屋大学・山崎けい子, 富山大学

Are Hajikano, Nagoya University・Keiko Yamazaki, University of Toyama

1. はじめに

会話をする際、相互行為上さまざまな問題が起こることは避けられない。例えば、自分が言いたいことが上手く言えない、相手の話が聞こえない、よくわからないなどである。このような発話、聞き取り、理解における問題が起こったとき、会話の参加者はさまざまなやり方で対処している。会話分析では、その一連の対処のやり取りを修復の組織という (Schegloff他, 1977)。

母語話者 (NS) 同士の会話だけでなく、日本語非母語話者 (NNS) を含む会話においても同様の問題が起こる。NNSにとってこのような問題にうまく対処することは、NS以上に重要な問題となるであろう。そのため、実際の発話データを詳細に分析し、会話の参加者の問題解決のやり方を明らかにすることは、学習者、教師双方にとって、その過程を意識化させ、学習、教育に応用する上で有効であると考える。

本研究は、その一助となるべく、日本語非母語話者 (NNS) を含む3人の会話における他者開始修復 (後述) を対象とし、そのやり取りがどのように行われているかを会話分析の手法を利用して記述・分析することを目的とする。扱う現象は、NNSの発話が、その聞き手であるNSにとって何らかの問題となり始められた他者開始修復であり、かつ、一つの問題に対し、その解決過程で会話の参加者3人が関わっている事例である。その結果をもとに、最後に会話分析の知見の教育への応用の必要性、教師として再考する価値のある点について触れたい。

2. 他者開始修復

他者開始修復とは、相手の発話に対する聞き取り、理解の問題に対処するやり取りをいう (Schegloff他, 1977)。以下の例では、01行目のMの発話が、聞き手W

の問題となる発話（⇒トラブルソース、以下TS）である。聞き手であるWは、02行目で、Mの発話に聞き取りまたは理解の問題があることを相手に示す（→修復の開始）。それに対して、03行目は、Mが01行目を繰り返すことで、Wの問題を解決している（⇨修復の解決）発話である。01行目から03行目までの一連の修復の連鎖が終了し、04行目でWは元のやり取りに戻り、01行目のMの質問に答えている。事例中「↑」は音調が上がっていることを表す。

01⇒ M： 何てところですか↑

02→ W： ん↑

03⇨ M： 何てところ↑

04 W： サンパウロ

他者開始修復は多くの場合、TSの話者に対して次の順番で聞き手が修復を開始し、その修復開始はTSの話者に宛てられる。そして、修復の解決はTSの話者によってなされることが優先される（Schegloff他, 1977）。しかし、会話の参加者が3人以上の場合、いくつかの異なった他者開始修復が観察される。Egbert (1997)は、多人数会話に特徴的なものとして、1) あるTSに対して2人以上の参加者によって始められる他者開始修復、2) あるTSに対して開始された修復が、TSの発話者以外の参加者によって解決される他者開始修復、そして、3) 会話の分裂（参加者全員が一つの会話に参加している状態から、少人数のいくつかのグループに分かれて会話が同時進行する状態になること）や、分裂した会話の統合、そして会話に参入するための装置として使われる他者開始修復、の3つの類型を示し、他者開始修復が相互行為上何を行っているかをデータから明らかにしている。

Egbert (1997) によると、1) あるTSに対して2人以上の参加者が修復を始めるのは、2つの別々の修復が起こっているのではない。2人目の修復の開始は、一見重複した無駄な行為のように見えることがあるが、多くの場合、最初の修復開始者に同調することで一つの仲間のように振る舞うリソースとして、他者開始修復が利用されていると述べている。また、2) TSの発話者以外の参加者によって修復がなされる事例においては、その行為は社会的に不適切なものと扱われ、参加者によって無視されたり、本来修復を行うべきTSの発話者によって改めて修復がやり直されたりすることを示している。さらに、3) については、他者開始修復を利用することで、参加者は、今従事しているやり取りから抜け出たり、元のやり取りに戻ったりすることができること、また、他者開始修復の受け手はそれに反応することで、その参加者の会話への参加を承認することができることと述べている。

Bolden (2011) は、多人数会話におけるもう一つの興味深い他者開始修復として、修復の開始がTSの発話者以外に宛てて行われる事例を分析している。Bolden は、このタイプの他者開始修復は、話の進行の維持（今続いている話を止めないように配慮する）、または、対話相手の社会的知識（相手が修復を解決する知識を持っているか、修復を解決する権利・義務を持っているか）への志向の現れであると分析している。

本研究では、収集したデータに現れた3つの他人数会話に特徴的な事例、上記 Egbert (1997) の1) と2) の類型と、Boden (2011) の分析したタイプの事例を取り上げ、そのやり取りを記述・分析する。

3. 本研究で扱う現象

本研究は、NS2人とNNS1人の3人の会話に現れた他者開始修復のうち、NNSがその修復過程にかかわっているやり取りを扱う。観察された他者開始修復には、NSの発話に対して、NNSが聞き取り、または理解の問題として修復を開始する事例と、NNSの発話に対してNSが修復を開始する事例がみられた。本研究では後者を取り上げる。まず4. では一つのTSに対して2人が修復を開始した事例、5. ではあるTSの話者に対し開始された他者修復が、TSの話者以外の参加者によって修復された事例、6. ではTSの話者以外の参加者に対して、もう1人の参加者が修復を開始した事例を分析する。

なお、本研究で使用したデータは、日本国内の大学生2人と留学生1人の会話をビデオカメラとICレコーダーで録画、録音したものである。文字起こしは西阪他 (2008) に基づいている。

4. 2人による修復開始

本節では、一つのTSに対して、他の参加者2人が始めた他者開始修復をみる。事例1は、大学生2人（YとH）と短期留学中の留学生（M）の会話である。

事例中の下線「ロ」はその音が強くなっていること、「:」は音が延びていること、「=」は2つの発話が途切れなく密着していること、「[」は発話の重なり、「(0.5)」は0.5秒の間合い、「-」は言葉が不完全なまま途切れていることを表す。

事例1

01 Y: ロシアの大学って5年って言ったっけ

(紙面の都合で中略)

- 05 M: まあ 5年生:なんですけ [ど: ここに来て
 06 H: [う [ん
 07 Y: [うん
 08 H: うん
 09⇒ M: 留年 (0.5) になってて
 11 H: あ
 12→ Y: [留年ていうか うー
 13 M: [りゅー りゅー うー
 14→ Y: [[あのー
 15⇒ H: [[休学 [みたいな感じして
 16 Y: [休学- はい うんうん
 17 M: [そうですね
 18 H: あ 一緒だ [私も=
 19 Y: [ん
 20 M: =それになって:
 21 H: は:い

M (NNS) の09行目、「留年」がTSである。まず、11行目でH (NS) が「あ」とMの発話を受け止めたことを示すと、12行目、14行目でY (NS) が「留年ていうか うー あのー」と修復を開始する。14行目と重なって、H (NS) も「休学みたいな感じして」と修復を行っている。さらに、Hが「休学」という言葉を出したところで、Yも「休学-」と言い、Hの「(休学) みたいな感じ」という発話を聞きながら「はい うんうん」とHの発話を承認している。このやり取りでは、TSの話者であるMは、Hの「休学」という修復の解決に至ったところで、すかさずYと重なって「そうですね」とHの修復を承認している (17行目)。

Egbert (1997) は、2人目の修復の開始は、最初の修復開始者に対する同調であると述べた。Egbertの事例は、2つの修復がほぼ同じ発話の繰り返しであり、本事例とは異なっている。しかし、HとYは2人でお互いに発話を補い、承認しながら共同で修復発話を構築しており、Egbertの事例のように、本事例でも2人が同調しつつ一つの仲間のように問題に対処していることがわかる。

ここでもう一つ触れておきたいのは、修復連鎖が終わったあとのHとMの振る舞いである。修復連鎖は、一般的に主な話の流れから外れたやり取りであり、終了したあとはもとの流れに戻ることが期待される。この事例でも、TSを含む発話09

行目「留年 (0.5) になってて」は明らかに発話の途中であり、修復連鎖が終了したあとはもとの話に戻ることが期待される。しかしここでは、Hが「あ 一緒だ 私も-」と自分も同じ経験をしたことを話し始める。これはMにとって自分の話が続けられなくなる可能性を生む。20行目のMの発話は、18行目と間合いなく発話されており、さらに「それになって:」と09行目とほぼ同じ形の発話を利用することで、修復連鎖前に戻り、自分が話を続ける権利と義務があることを強く表しているといえる。21行目で、Hが18行目の話を続けることなく、Mの発話を承認するような反応をしていることも、Mの正当性をHも認めたことを表しているといえる。

5. TSの発話者以外の参与者による修復

次に、TSの発話者に対して開始された修復に対して、TSの発話者以外の参与者が修復の解決を行っている例をみる。事例2もUとTが大学生でMが留学生である。事例中の () は聞き取れなかった、または不明瞭な発話、「(.)」は短い間合いを表す。

事例2

- 01 T: あれ 人口:どのくらいほど: : いー いるんだっけ↑サンパウロは
 02 D: じんこー う: : : : :んhhh
 03 (2.0)
 04 U: ブラジル [(で-)
 05 D: [せんまん以上.
 06 (0.5)
 07 T: だよね
 08 [東京より大きい(んだ)
 09⇒D: [() せんまん (以上) [そうそうそう
 10→U: [ごせんまん↑
 11☞ (1.2) ((0.6秒後からTが顔を横に振る))
 12☞ T: [ううん
 13 D: [え↑
 14 さm- [せ- せ-せんまん
 15 T: [あ (.) ブラジル人口↑=
 16 U: =せんまん↑ [(はあ)
 17 D: [ああ [ブラジル 人口: : : : ほぼ: : : (.) 2億.
 18 U: [ブラジルって 全員で何人↑

事例2のTSは09行目のD (NNS) の「() せんまん (以上)」である。この発話は05行目のDの発話とほぼ同じであるが、08行目のT (NS) の発話と重なっている。10行目のU (NS) の「ごせんまん↑」は、聞き取れなかったことを主張している修復開始であろう。また、Dが「せんまん」というNSが人口を表すときあまり使わない語彙を使っていることも修復の引き金になっているといえよう。

この修復開始は、直前のDの発話がTSであり、発話開始時にUの視線がDに向けられることから、Dが答えることが期待されているように見える。しかし、この事例では、11行目でTが首を横に振り、そのあと12行目で「ううん」と修復解決をしている。Dは、12行目と重なって、「え↑」と聞き返したあと、「さm- せ- せ-せんまん」(13、14行目) とUの10行目の修復開始に対して新たに解決を行っている。

この事例でTがTSの話者であるDより先に反応できたのは、Uの視線と関係がある。Uは、10行目の「ごせんまん↑」を発話するときDに視線を向けるが、発話開始時点で、DがTのほうを向いているのを見て、Tに視線を移動させる。つまり、10行目が言い終わった時点でUの視線はTに向けられている。Dは、UがTに視線を向けているところだけを見ているため、Dには、その修復開始が自分に向けられていないと思った可能性が高い。Dがすぐに修復解決の発話をしないのはそのためであろう。一方、Tはこの修復開始発話が最初Dに宛てられていたことを見ている。したがって、TはUの修復開始がDに宛てられていることを理解している。11行目の0.6秒の沈黙の間、TがUに視線を合わせながらも、表情も動かさず沈黙していることは、その理解の現れであろう。しかし、修復の本来の宛先であるはずのDが沈黙しているため、TはDより先に修復の解決として首を横に振り、続けて「ううん」と発話する。つまり、TがDより先に修復開始に解決を行ったのは、Uの視線とDの沈黙が理由であるといえる。

Egbert (1997) は、TSの発話者に宛てられた他者開始修復が、他の参与者によって解決されると、その参与者の行為は多くの場合不適切なものと扱われることを観察している。本事例でも、UがDに宛てた10行目の修復開始に、Tは11行目で0.6秒の沈黙のあと言葉を発せず首を横に振る。これは、自分に宛てられていない修復に答えることは相互行為上不適切であることにTが志向しているからであろう。

Tは12行目で「ううん」と発話することでUの修復開始に対する解決を行っているが、この時点で、Uの視線はDに移動している。UがDに視線を向けると、Dは「え↑」(13行目) とUに新たな修復を開始するが、すぐに「さm- せ- せ-せんまん」

(14行目) と、10行目のUの修復開始の解決を行っている。結果的に、Tの修復の解決発話は連鎖上機能していない。また、最初の修復の開始者であるUも、Tの修復の解決(11行目、12行目)に反応せず、14行目のDに対して、受け止めを行っている(16行目)。つまり、Tの修復解決発話は、相互行為上起こるべく妥当な理由があったにもかかわらず、本人も含めたすべての参加者によって不適切なものとして扱われていることが観察される。

5. TSの発話者以外の参加者に宛てて開始された修復

最後に、TSの発話者以外の参加者に宛てて開始された修復の例をみる。事例3で取り上げるやり取りは、Bolden (2011) の事例と異なり、修復の開始が、TSを含む発話の直後ではなく、少し遅れて現れている。また、TSの問題の性質がBoldenのとは異なっており、他者開始修復としてバウンダリーケースであるといえよう。しかし、ある話者の話のある一部分に対して、その聞き手が、その話者ではなくもう一人の参加者に確認要求の質問をするという点で、Boldenのパターンと類似している。そのため、本研究ではこの事例を分析対象とした。

事例3も大学生2人(HとI)と留学生Kの3人の会話である。3人はKを中心に右にH、左にIが座っている。Kは、3人が所属する大学のサッカー部がプロのサッカーチームと対戦した試合について話している。事例中の「> <」は記号に挟まれた発話が早くなっていること、「h」は呼気音、または呼気をともなう笑い、「.h」は吸気音、「¥ ¥」は挟まれた発話が笑い声でなされていることを表す。

事例3

- 01 K: あの さんじゅういち日 8月 その:: ((K: 行頭で視線をIに向ける))
 02 [サッカー試合(.) 見た
 03 I: [はい
 04 (0.2)
 05 K: その.
 06 I: サッカー↑
 (紙面の都合で中略。Iは用事で遠出していたため試合が見られなかった。)
 14 I: [見られなかった
 15 K: [テレビ: が中継↑ ((K: 行頭で視線を正面に))
 16 なんか [>生<中継: [があつt. ((K: 行頭で視線をHに向ける))
 17 I: [ええ ええ [ええ
 18 H: [あ 中継もしとったんや

- 19 K: >そうですねく [あの： 私とタンさん
 20 H: [ハイライトでしかー
 21⇒ K: [あの：- (0.2) 現場で 見h [たh カタヤマくん.
 22 H: [う ふ：：ん ((H: 行頭で視線を落とす))
 23 I: [((咳))
 24⇒ K: (0.4) キーパー ¥なん(て)¥ .hh ((K: 行頭で視線を正面に向ける))
 25 H: (あん) [ぼろ負けhしh (たhやhつh)
 26 K: [でも 最後： 負けちゃった ((K: 「負け」 からIに視線))
 27 け [どh 四対零h .hhhh
 28 I: [う：：ん
 29 K: °(ちよと すごー) ん：：° ((K: 行頭で視線を正面に。I: 視線を落とす))
 30 (0.8)
 31→ I: カタヤマ君がキーパーな [の↑ ((I: 行頭でHに視線を向ける。H・K: 同時
 32⇨ H: [うん にIに視線を向ける))
 33 K: °うん [うん°うhんHhhおういんしていr .hhh °うん°
 34 I: [あ そうなんだ. へ：：：：：
 35 K: で あと 夜：は あの なんか

事例3では、K (NNS) が両脇に座っているI (NS) とH (NS) に交互に視線を向けながら、友人のタンさんと、知り合いのカタヤマ君がキーパーをやっているサッカーの試合を見に行ったが、負けてしまったという語りを行っている。そのあと0.8秒の間があって、31行目でIが、「カタヤマ君がキーパーなの↑」と自分の理解を確認する質問をHに視線を向けて行っている。Iが発話を始めると、HとKは同時にIに視線を向け、質問を宛てられているHが、Iの発話末に重なって「うん」と確認を与える。すぐあとにKも「°うん うん°うhんHhhおういんしていr .hhh °うん°」とIに確認を与えたあと、(カタヤマ君を) 応援していることを付け加えている。

この修復のTSは、21、24行目のKの「カタヤマくん. (.) キーパー」である。他者開始修復は、ほとんどの場合、TSの発話の次の順番に起こる (Schegloff他, 1977) が、この事例では31行目と少し離れた位置で起こっている。その理由は、TSを含む発話を行っているときのKの視線 (最初にHに向けられ、次に誰もいない正面に視線が移動している) と、TS発話の次の順番 (25行目) でHがKの発話に反応していることと関係しているであろう。つまり、この時点でIはやり取りの外に置かれており、ここでIが修復を開始することは2人のやり取りを中断させることになる。さらに、26行目でKはIに視線を向け「でも 最後： 負けちゃったけどh」と続け

たため、Iはこの発話に反応する必要もあった。そのために、KがIから視線をはずし、0.8秒の間が起こったあとに、Iは修復を始めたと考えられる。

ここで考えなければならないのは、IはTSの話者であるKではなく、Hに宛てて修復を行っていることである。しかも、Iの31行目は、小声ではないが少しトーンを抑えたような話し方で、まるでKを迂回してHだけに話しかけているようにも聞こえる。他者開始修復は、相手の発話に対する聞き手の理解の問題に対処する。このことは、自分の理解力についての問題と同時に相手の話し方の問題を持ち出すことにもなりうる。ゆえに、他者開始修復はしばしば非同意や非難として働く

(Schegloff, 2007)。本事例でも、IがKに宛てて修復開始をすることで生じるかもしれない、Kの話し方や語り方に対する否定的な評価を軽減するために、IはHに宛ててこの修復を開始したと考えられるのではないだろうか。

しかし、この行為は同時に、サッカーの試合を見に行ったという語りの語り手であるKの立場を否定することにもなりうる。この語りについての知識や経験は語り手であるKのものであり、Kは聞き手からの質問に答える権利と義務を持っている。ゆえに、K以外の参加者にKの語りの内容について質問することは、Kの語り手としての立場を損なう行為となりうる。32行目でHがIの確認要求に答えているにもかかわらず、33行目ですぐにKが「うん うん うんHhh」と確認を与え、さらに、カタヤマ君を応援していることを加えて、さらに語りを継続していることは、Kが語り手としての自分の立場を主張していることの現れであるといえよう。

この事例については、Kの語りの構造と21行目のIの確認要求の質問との関係という観点からも、さらなる分析が必要であろう。

6. まとめと日本語教育における意味

ここまで3つの事例で修復の過程に参加者3人がかかわる他者開始修復をみた。事例1では、NNSの発話に対してNS2人が協同で修復を開始し解決に至っていた。また、修復連鎖が終わり元に戻る際、NNSが話を続ける権利が損なわれそうになるが、うまく自分の権利を主張して順番を取っている様が観察された。事例2では、自分に宛てられていない修復開始に答えるというNSの行為を、TSの話者であるNNSと修復の開始者であるNS、そして、その答えを行ったNS自身も、不適切な行為として扱っていることが観察された。事例3では、NSがTSの話者であるNNSではないもう1人のNSへ修復を開始しているのは、NNSへの配慮であったかもしれないが、

結果的にNNSの語り手として立場を損ねた可能性があること、それにもかかわらずNNSは自分の立場をうまく主張し語り続けていたことが明らかになった。

このように、会話分析の手法を使って実際の会話を記述・分析することで、会話がさまざまなやり方で相互行為上の問題に取り組んでいることが浮かび上がる。Wong他(2010)は、会話分析で明らかになった会話のメカニズムを利用する能力はコミュニケーション能力のひとつであり、教師も学習者もそれを意識化することは、その力を伸ばすことに役立つと主張している。会話分析の知見を言語教育・学習に生かす試みはまだ少ないが、このような分析結果を教師、学習者と共有することは意味のあることだと考える。学習者にとっては、やり取りにおいて何が問題となりうるのか、どのように対処すべきなのか、また一つの行為が何をしているのかなどを意識化することができ、そこから、自らの会話のやり方を振り返り、自分にとって適切で好ましいやり方を選ぶことができる。また、教師にとっても、自分の行為が聞き手にどのように捉えられるのかをもう一度考えるきっかけになる。本研究の結果も、他者開始修復のような相手の話をきちんと理解するための行為が、相手の権利をそこない、相手を能力のない者として扱うことになる可能性に気づき、自らのやり取りを振り返るきっかけとなるであろう。

本研究は科学研究費補助金(研究種目:挑戦的萌芽研究 課題番号:23652115 研究課題名:「日本語非母語話者会話における修復とその相互行為的意味:日本語学習への応用に向けて」)の助成を受けている。

参考文献

- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子(2008)「特集「相互行為における言語使用:会話データをを用いた研究」について」『社会言語科学』Vol.10, No.2, pp.13-15
- Bolden, Galina B. (2011). On the Organization of Repair in Multiperson Conversation: The Case of “Other”-Selection in Other-Initiated Repair Sequences. *Research on Language & Social Interaction* 44(3), 237–62.
- Egbert, Maria M. (1997). Some Interactional Achievements of Other-Initiated Repair in Multiperson Conversation. *Journal of Pragmatics* 27, 611–634.
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis 1*. Cambridge, University Press, Cambridge.
- Schegloff, Emanuel A., Jefferson, Gail, & Sacks, Harvey. (1977). *The Preference for*

Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language* 53(2), 361–382.

Wong, Jean, & Waring, Hansun Z. (2010). *Conversation Analysis and Second Language Pedagogy*, New York: Routledge.